

家政学部のカリキュラムの変遷 (第6報)

福 島 由利子

Home Economics Undergraduate Curricula –
Toward A New Paradigm For Home Economics

Yuriko Fukushima

1. ホーム・エコノミクスへの批判

1) フェミニスト側からの批判

19世紀のアメリカの人道主義的な風潮は、奴隷解放運動、女性解放運動、女性教育運動の3つの社会運動を支持した。宗教的な情熱が引き起こした改革運動は、道徳の守り手であり、共和国の母としての女性の意識と行動を家庭から拡大していくことになった。1830年代には、禁酒運動、奴隷解放運動へと発展した。1840年には、ロンドンで世界奴隷反対会議が開かれた。この会議で、奴隷廃止運動の指導者と結婚したエリザベス・スタントンは、奴隷制廃止論者のルクリーシア・モットと出会った。2人は帰国後、女性の権利のための会議を開く約束をした。1848年に、ニューヨーク州のセネカ・フォールズの教会で、最初の女性の権利のための大会が開かれた。大会では、男女平等を実現していくための議案が採択されたが、選挙権だけは、過激な主張であると反対された。その後は、女性の参政権が、フェミニズム運動の中心となっていった。フェミニストは、ホーム・エコノミストが、女性の参政権運動にエネルギーを投入しなかったことに対し批判的である。

男女の政治的・経済的・社会的な平等を主張するアメリカのフェミニズムは、時代によって揺れ動いた。先ず、女性の役割を果たそうとする、男女の同質性よりも異質性を強調することから出発し、後に男女の同質性を強調する方向へ動いた。男女の同質性を強調するフェミニズムは、1960年に再び起こった。1972年にはフェミニストが主張した男女平等を憲法によって保障しようとするERAが提案され、最高潮に達した。1973年の家政学会でフェミニストは、ホーム・エコノミストを性差別を促進すると激しく非難した。

1970年代後半からは、男女の異質性が再び強調されるようになり、保守的な、男女の役割へのノスタルジアが起こった。1972年に議会を通過したERAは、憲法修正に必要な批准が得られず、1982年に廃案となった。フェミニズムの原理が受け入れられないのは、様々

な理由が考えられる。1970年代後半からは保守主義が台頭したこと、女性を抑圧する根源としてあらゆる家族を否定するグループがあること、家族の哲学がないこと、ユニセックスに対する不安や、メディアのシンボルにされて、自由、平等など政治的な概念に合意がないことなどによる。

ホーム・エコノミストであり、フェミニストでもあるトンプソンは、フェミニストは、公的な領域では発言するが、私的な領域を無視しており、歴史の中の女性の声を無視して、家族や家庭を低く評価することは、家父長制の思考ではないかと批判的である。家父長制は、女性や女性の世界、女性の仕事、家族、家庭、フェミニンと連想されるものを低く評価する。フェミニストは自らを家父長制の思想から解放していないし、女性を解放どころか苦しめていると言うのである。ホーム・エコノミックスが、経済的・社会的な不利益から女性を解放する運動であったとは、フェミニストはとらえない。

2) ホーム・エコノミストの反省

他方、ホーム・エコノミックスの問題点については、内部からもきびしい指摘がある。ブラウンの歴史研究によると、ホーム・エコノミックスはどのような学問であるのか、目的は何なのか、専門の内容や組織はどうあらねばならないのか、専門家は社会でどのような使命を持っているのか、実践の規範は何かに関して、一貫性を欠き、また、これらはホーム・エコノミストの間で合意がない。この事実をホーム・エコノミストは、謙虚に反省しなければならない。ホーム・エコノミックスの歴史の様々な過誤や経験に学びつつ、将来の方向性を見いだしていかなければならないであろう。

19世紀後半に、ドメスティック・エコノミーの必要性を説き女性の教育運動を開始して、女性の社会的な地位の向上に努めた先駆者や、最初に大学の中にドメスティック・エコノミーのコースの設置に尽力したランド・グラント大学の関係者は、女性、家族、家庭生活、ホーム・メーカーへの共通の関心を示した。しかし、専門を構成するものは何であるのかは、定かでなかった。変動期の家族の問題解決のために、同じ関心を持った人々を結集して、1899年から毎年10年間にわたり開催されたレイク・プラシッド会議において、初めてホーム・エコノミックスの目的やカリキュラムが議論された。意見は色々あったが、専門分野に対する見解の相違は、話し合いによって合理的に解決されることはなかった。会議では当初は、知的・道徳的教育を通して、自立した人間を開発し社会のために貢献しようとする人格への関心が表明されていた。けれども、後半になってからの会議は、リチャーズのリーダーシップによって、家庭を強化するために、テクノロジカルな発展を女性の領域に持ち込み、家事の科学的な管理に差し替えられた。家族へ物質的、経済的な側面で貢献する学問へと変わった。この傾向は、1930年代まで続いた。

1930年代、40年代に学会が公表したステートメントでは、ホーム・エコノミックスの目

的は再び家族を通して個人の能力の開発に戻った。女性は職場に進出した。ランド・グラント大学では、時代の要求に応えるために、職業教育を強化した。カリキュラムは細分化された。恐慌、第2次大戦は、物的資源の節約、食衣中心へカリキュラムを偏らせた。人間や社会の問題と切り離された家庭経営が教えられた。第2次大戦後、女性は再び家庭へ戻った。1950年代の女子大生のうち、半数以上は、夫を支えるためか、専業主婦になるために退学している。ホーム・エコノミックスの目的は、個人、家族、家庭、民主的な社会に関心を寄せた。しかし、60年代のマクグラスらの研究は、ホーム・エコノミックスの目的をどう達成するのか具体的にしなかった。

これまでホーム・エコノミックスが公言した目的は、個人、家族、家庭、社会への強い関心であった。この関心は、科学技術のように中立的なものではない。個人や家族の利益を守るために諸条件を改善する価値を志向するものである。社会の中での個人や家族のより良い生活にかかわるホーム・エコノミックスの活動には、政治的・道徳的な意味が含まれるが、個人や家族の幸福の本質をなすものが何であるのか明白でなかった。ホーム・エコノミストの活動は、科学とテクノロジーのイデオロギーを採用した。そのために、ホーム・エコノミックスの政治的・道徳的な目的は見失われていった。分析的—経験科学のテクニカルなルールが唯一の行動様式となり、優勢な社会価値を容認し、不合理な社会関係を支持することになった。自立した道徳的行為者としての家族の能力の開発は、技術的合理性をもっては促進されない。

ホーム・エコノミックスはどのような学問であるのかについても、理論科学、応用科学、実践科学とするなど、様々であった。ホーム・エコノミックスを規範的な関心のない「人と環境との関係を研究する」理論科学とみたり、また、知識を総合して、家族の生活に応用する「応用科学」とみるホーム・エコノミストが多かった。現在でも情報化社会の中で、ホーム・エコノミックスを情報仲介役とみる人が多い。アメリカ家政学会の要請によるブラウンとボウルチの研究は、ホーム・エコノミックスを、理論科学や応用科学とは異なる実践科学とみた。実践科学は、家族の生活の改善を目指す規範的な関心が中心となる。ブラウンらはホーム・エコノミックスの中心価値は、「個の自立」と「個の自立を促進する民主社会」であること、「家族」、「自己形成」、「手段的、コミュニケーション的、解放的」、「歴史的、社会的、経済的、政治的な脈絡」などはホーム・エコノミックスの中心概念であること、また、ホーム・エコノミストの使命は、自立し、社会参加する家族メンバーの行動システムの確立のためにサービスすることとした。これまで専門分野としてのホーム・エコノミックスの内容は、分析的—経験科学に限定され、家族の本当の利益にかかわる問題が取り残されてきた。ブラウンらの研究は、今後この分野で、政治、自由、責任、愛、幸福など、家族生活の中心的な概念の研究が必要であることを示唆している。

ホーム・エコノミックスは、このようなフェミニストからの批判や、ホーム・エコノミ

ストによる研究成果を踏まえ、カリキュラムの改革が要求されている。

2. カナダの小規模教養大学の試み

カナダのプリンス・エドワード島のシャーロットタウンは、1864年に沿岸の植民地とカナダの代表が集まり、連邦を形成するための会合が開かれた歴史上重要な所である。このシャーロットタウンで、1986年にカナダの家政学会が開催されることになった。学会に先立ち、シャーロットタウンにあるプリンス・エドワード・アイランド大学(University of Prince Edward Island)で、3日間のワーク・ショップが計画された。この大学はリベラル・アーツの伝統を守る、小規模な大学である。

この大学の家政学部には、被服デザイン、食物栄養、家族、ホーム・エコノミックスの4つの学部がある。食物栄養学科は栄養士の養成を目指し、その他の学科では家庭科の教免が取得できる。共通科目として、学生は、被服デザインの授業科目の中から3科目、食物栄養の中から5科目、家族の中から5科目、ホーム・エコノミックスの中から3科目を履修することになっている。

被服デザイン学科で開講されている科目には、被服学、繊維科学、デザイン、被服構成、服装史(イヌイットやインディアンの衣装も含む)、住居史などがある。

食物栄養学科は、卒業後1年間のインターンを経て栄養士になる。成績は70パーセント以上が要求される。

家族学科は開講科目が多い。経営関係では、システムズ・アプローチによる家庭経営学、家族の経済的意思決定や、個人的・公的意思決定の関連性について考える家庭経済学、消費者教育のコースなどがある。教免取得のために、家政学教育、教育実習、教育法、コミュニケーションなどが開講されている。家族のコースとしては、特別研究、家族関係、学際的な女性学のコースがある。その中で女性のとかく無視されがちな伝統的な役割や貢献も含めて、変化し拡大する女性の領域が勉強できる。

ホーム・エコノミックスの学科では、歴史とフィロソフィに重点が置かれ、トータルな人間教育に欠かせないトンプソンが主張するヘスティア領域を深く学ぶことができる。

ワーク・ショップの講師として、ニューヨーク州立大学で女性学や消費者教育を教えているトンプソン(Patricia Thompson)が招かれた。ニューヨーク州立大学は外部からの要請でイメージ・チェンジをはかるために、学部の名称を、ホーム・エコノミックスから「家族と消費者教育」に改めている。ワーク・ショップはホリデー(Jean Holliday)が世話役となり、20名が参加した。ホリデーは、1984年に家庭科教育の雑誌「What's New in Home Economics」に掲載されたトンプソンの論文に注目していた。トンプソンは、ホリデーの恩師でもあるミシガン州立大学のポウルチ教授の影響でホーム・エコノミックスを学ぶこ

とになったが、それ以前に、政治学、教育学、社会学など幅広い分野で学位を得ている。豊かな経験を持ってホーム・エコノミックスの世界に入ったトンプソンの熱意、ホーム・エコノミックスと女性学とを結ぶ新しい視点は、参加者に強い印象を与えた。

ホーム・エコノミストとフェミニストの溝を埋め、コミュニケーションを助けるメタファー（トンプソンはギリシャ神話からヘスティアとホメロスを引用した）が紹介された。ワーク・ショップ（第1回ヘスティア会議）の記録は、1991年に“Home Economics and Feminism”の書名でプリンス・エドワード・アイランド大学から出版された。序文の中で、プリンス・エドワード・アイランド大学のエリオット学長は、トンプソンの講演や討論の内容は、小規模なりベラル・アーツの伝統を守る大学の中で専門分野としての家政学部の存在意義を強く肯定したと評価している。

1992年の夏には、第2回のヘスティア会議が開催され、トンプソンや、ブリテイシュ・コロンビア大学のウェインズらが参加した。フェミニストが無視した女性や家族に焦点をあて、これまでのホーム・エコノミストのユニークな貢献が見直された。ホーム・エコノミックス運動は、私的な領域である家庭生活と公的な領域との平等への要求であったことや、ホーム・エコノミックスのアイディアは、個人（男性にも女性）に、家族に、各世代に再評価されねばならないことなどが強調されている。これは、ブラウンとポウルチの研究で明らかにされた、ホーム・エコノミストの私的、公的領域における使命の中にも表明された通りである。人間はいつも domestic economy と political economy を経営してきた。第2回のヘスティア会議の記録は、1992年に、“Bringing Feminism Home”の書名で、同じくプリンス・エドワード・アイランド大学から出版された。2回目のヘスティア会議でトンプソンは、ピーチャー、リチャーズなど初期のホーム・エコノミストのメッセージを読み直し、現代的な意味を再定義している。

3. もう一つの女性運動

フェミニストは、ホーム・エコノミックスを性役割を固定化する分野であると誤解し、女性の解放をさまたげる不適切な理論であると退けた。フェミニストにとっては、家庭や家族は中心の論点ではないが、ホーム・エコノミックスでは、家庭生活は研究焦点である。ホーム・エコノミストは、女性の家庭への関心を尊び、平凡な日常生活での女性の貢献や人間の生活を占める平凡な出来事、家事、育児に関心を寄せて研究した。歴史的に、ホーム・エコノミックスはフェミニズムとの関連で、もう一つの女性運動として出発したことは、前述（1の②）の通りである。公的な領域には耳を傾けるフェミニストに私的な領域の女性の声は届いていない。このようなフェミニストの誤解から脱出するために、トンプソンはホーム・エコノミックスの歴史を見直した。そして、ホーム・エコノミックスが決

して女性の解放をさまたげるような運動ではなく、家庭の中の女性の経験にもとづく視点から出発して、経済的・社会的な不利益から女性を解放するためのものであり、私的・公的領域の平等を訴える女性運動であるとみた。

ホーム・エコノミックスは、日常生活を知的に効果的に営むために組織された知識を提供する。このアイディアは、出エジプト記18章の「あなたのしていることは良くない。あなたも、あなたと一緒にいるこの民も、必ず疲れ果てるであろう。このことはあなたに重過ぎるから、ひとりですることができない。…あなたと共に彼らに、荷を負わせなさい」の中に垣間みることができる。これはアリストテレスのポリティックスや、クセノフォンのオイコスに示され、人間の歴史の中でくり返されたテーマである。人間に最も必要なものとして、日常生活の実践的な事柄に関心を寄せたのは、アメリカでは、19世紀初めのベンジャミン・トンプソンであった。彼は家政の革新と栄養学の普及に貢献した科学者であった。同じ関心を共有してドメスティック・エコノミーの教育を開始したのは、エマ・ウィラードや、キャサリン・ビーチャーであった。

女子の高等教育機関に、ホーム・エコノミックスを開設するように運動したビーチャーが、最初のホーム・エコノミックスの教科書、“A Treatise on Domestic Economy”を出版したのは、ロンドンで奴隷反対会議が開催された翌年の1841年のことであった。キャサリンの父親は最後のカルヴィニズムの戦士として神に仕えた牧師であった。神の意志に絶対服従を強いる専制的な父親であったようだ。名門出の母は、非常にやさしい人であった。キャサリンは父親の影響を強く受けたと言われる。キャサリンよりも12歳年下の妹ハリエットは、母を亡くした後、姉の学校で学び、姉を手伝ったが、母の思い出を大切にしていた。ハリエットは神学校の教授と結婚した。夫は気むずかしく、暴君的で、結婚生活は、疲れと消耗の日夜であったと自ら記している。健康を回復した後、彼女は作家となり、奴隷制度を告発する作品を書いた。キャサリンとハリエットは、“Principles of Domestic Science”など、個人的領域で家族の中の女性やその仕事の改善を説いた共著を残した。ビーチャーのテキストには、若いホーム・メーカーが、健康を維持して、自信をもってホーム・メイキングの役割を果たすために必要な、衣・食・住・育児などの知識がもりこまれている。マルティンは、ビーチャーのテキストを単なる家事の描写とみるのは誤りであると言う。女性権利運動の多くのリーダーは、公的な領域で闘った。しかし、ビーチャーは、女性の選挙権だけがすべての問題を解決する万能薬とは考えなかった。ビーチャーは、人間活動の無視された領域に積極的な価値を見出し、その中で知的に行動するために必要なドメスティック・エコノミーのカリキュラムを示し、すべてに優先する家庭の聖職者の教育の必要性を訴えた。ビーチャーは、女性の神聖な仕事は、男性の仕事と同じように尊敬されるべきだと考えていた。そうすることが、公的領域との均衡を達成する道であった。

ところで、ビーチャーが示したモラルへの関心は、19世紀後半のフランスの初期の家庭

科のテキストやカリキュラムの中にもみられる。その中では、モラルとシビックとは区別されている。フランスのテキストでも、アメリカと同じようにホーム・メイキング以上のものを教える、つまり、自立した、道徳的主体の開発が考えられていた¹⁾。家庭生活の領域をどのように道徳的に向上させることが可能であるのかを示したビーチャーの著作は、過去のビクトリア時代の言葉をそのままに読みとるだけでは不十分である。トンプソンは、ビーチャーの目的は、ポリティカル・エコノミーを破壊することなくモラル・エコノミーを確立することにあつたわけで、今日ビーチャーのビジョンを継承していくには、個人や家族生活の価値を公的領域の中で強化させていくことであると述べている。

近代ホーム・エコノミックスを導いたりチャーズを、フェミニストは、「ドメスティック・サイエンスをクック・ブックの段階から導いた」、「ホーム・メイキングを確立した名誉は、特許状のような勝利でない」と評した²⁾。これに対してトンプソンは、フェミニストがすべての女性の歴史を含む枠組を提案していないのは失敗であると言う。ホーム・エコノミストは、公的世界の闘いにエネルギーを投入しなかったが、女性だけでなく、人間の幸福にかかわる総合的、全体論的、規範科学の概念を伝える方を選んだのである。

10回に及ぶレイク・プラシッド会議は、家庭生活のプロセスへ注目した。この分野の名称がホーム・エコノミックスと決ったが、それは、父権へのチャレンジであつた。新しい分野に父権の言葉は適切でないとした。研究は父権の範囲外のものが占めた。ホーム・エコノミックスの信念は、家族エコロジーを確立するために、女性が一番熟知しており、貢献した生活世界に関連していた。

4. トンプソンの視点

エコノミーやエコロジーはどちらもオイコスに由来する。オイコスは、日常の人間の要求をみたすために社会的につくられた個人的な領域である。オイコスは、現代の言葉には訳せない。ハウス以上の意味がある。古代ギリシャの家庭には炉があつた。その周りは家族や集団を守る親密な場所であつた。平和と安全の場所であつた。ここでは家族の生命を維持するための定型化された日常の活動が営まれた。古代ギリシャでは、家族は最も中心的で、永続的な制度であつた。ところが、西洋の歴史では、個人的領域のオイコス活動に対する偏見があつた。公的な領域のポリス活動の方が注目された。多くのフェミニストの著作はこの傾向を反映している。フェミニストは、女性がポリスから除外されていることにチャレンジするが、オイコスが除外されていることにはチャレンジしない。フェミニストは私的領域を地位が低いと退け、家父長制の岩の上で議論し続けている。トンプソンは、人間の生活世界、ハウスホールドの世界が除外されることがないように、また、ホーム・エコノミックスが正しく理解されるように、人間の2つの行動を、ヘスティアとヘルメス

をモデルにして説明しようとした。個人的な家庭内の領域は、住居の中心であった炉の火の女神からとってヘスティアとつけ、公的な領域は、公的な場所の守り手、商業とコミュニケーションの神からヘルメスとつけた。ヘスティアは、オリュンポスの12柱の神々のうちで、青年神ヘルメスとペアである。ヘスティアとヘルメスは、人間の私的・公的領域での行動を擬人化したものであって、男性や女性を意味するのではない。

ヘスティアは時間の神クロノスと地の神レイアーとの子女のうちで一番先に生まれた。ポセイドンとアポロンの両神の求婚を断わったヘスティアに、ゼウスは高い誉れを授けた。ヘスティアは、オイコスやその拡大したポリスでも首座を占める。元首の館、役人や元老の集まる炉辺はヘスティアを祭った。オリンピアの炉も同じである。個人や公の食事では、最初と最後にヘスティアに祈りを捧げた。炉はオイコスの霊的なセンターであった。ギリシャの家庭の炉は聖なる場所であり、これを燃え続けさせることは聖なる義務であった。1950年代のアイランドの田舎でも、母から娘へ炉の火は消されることなく受け継がれていた。

トンプソンは、フェミニストの理論の問題点は、女性の領域と男性の領域に区分された領域モデルにあるとみなし、性別役割をこえた人間の相互依存的・相互関連的な活動モデルを提案した。ヘスティアのパラダイムによって、ホーム・エコノミックスの焦点が日常の生活問題にあることに固執した。過去のホーム・エコノミストの伝統を受け継いだユニークな知識体系を強調した。ホーム・エコノミックスのカリキュラムの中で、衣食住の資源の管理、家族関係、保育、エージング、環境教育、消費者教育など、日常の生活教育を正当化する視点を示した。断絶したホーム・エコノミストとフェミニストとのコミュニケーションの道を開こうとした。ヘスティアーヘルメスのパラダイムによって、互いに補いあう必要性を説いたのである。

参考文献

- 1) Clark, L.L., *Schooling the Daughters of Marianne*, Suny Press, 1984.
- 2) Ehrenreich, B. and English, D., *For Her Own Good*, Anchor-Doubleday, 1979.